

初夏の不思議

小川未明

青空文庫

百姓しやうのおじいさんは、今年ことしばかりは、精せいを出だして、夏なつのはじめに、早はやくいいすいかを町まちへ出だしたいと思おもいました。

おじいさんは、肥料こやしをやつたり、つるをのぼしたりして、毎まい日ちのように、圃はたけへ出でては、

「どうかいいすいかになりますように。」と、心こころの中なかで、太陽たいように祈いのりました。そのかいがあつて、いいすいかになりました。おじいさんは、ある朝あさそのすいかを車くるまにのせて町まちの八百屋やおやへ持もつてゆきました。

「まあ、みごとなすいかですね。」と、それを見みた、八百屋やおやの主し人ゆじんもおかみさんも、びつくりしました。

「今年^{ことし}は、丹精^{たんせい}のかいがあつて、いいやつがなりました。」と、おじいさんは、ほくほくしました。

「それに、いつもよりか、早う^{はよ}ございましたね。」と、八百屋^{やおや}の主人^{しゅじん}がいました。

「お日さま^ひの照り^てあんばいが、ばかにようございましたもので、こんなによいやつがなりました。」と、おじいさんは、喜んで、自分^{じぶん}の作^{つく}ったすいかをながめながら、たばこをぱくぱくとすっていました。

「そうですとも、なかなかの丹精^{たんせい}じゃありません。」と、八百屋^{やおや}の主人^{しゅじん}もおかみさんも、おじいさんに同^{どう}情^{じょう}をしないものはありませんでした。

おじいさんは、すいかを八百屋やおやに卸おろして、自分じぶんはまた静しずかな平へ和いわな村むらに空からぐるま車まを引ひいて帰かえつてゆきました。これから、つぎつぎと生せい長いちようする圃はたけの野菜物やさいものに手てをいれてやらなければなりません。それで、おじいさんは、なかなか暇ひまというものがありませんでした。

八百屋やおやの主人しゅじんは、小僧こぞうを呼よびました。

「このすいかをかついで出でて、売うつてこい。」といいました。

すこし値ねは高たかいが、はしりではあり、こんなにいいのだから、売うれないことはない、主人しゅじんは考かんえました。

「もう、半月はんつきもたちや、すいかだつて珍めづしくはない。いまなら値ねが張はつても売うれるだろう。」と、主人しゅじんは、つけくわえていい

ました。

小僧は、遠方から、この店に雇われてきていました。正

直な少年でありましたが、生まれつきものをいうときに、

どもる癖がありました。そして、急ぎ込めばますますもるので

ありました。だから、小僧がものをいう時分には、耳たぶが赤く

なつて、平生でさえ、なんとなく、そのようすがあわれに見ら

れたのであります。

小僧は、主人にいつかつて、両方のかごに幾つかのす

いかを分けていれました。それをかついで、町の中を売って歩き

ました。また、さびしい屋敷町の方へと、はいつていったので

あります。

ある家の前へきましたときに、女が呼び止めました。家の中から、もうそんなに若くはない、年をとった女が出てきて、

「どれ、すいかを見せておくれ。」といいました。

小僧は、肩からかごをおろしました。

女は、かごの中をのぞいて、いろいろすいかを取って見ていましたが、そのうちに、一つ一つ、値をききはじめました。小僧は、どもりながら、その値をば答えました。

「なんて、高いすいかだろう。」と、女は、びっくりしたように、大きな声でいいました。

「お、奥さん、まだすいかは、はしりですから、た、高いのでございます。」と、小僧は、どもりながら答えました。

おんな
女は、小僧のいうことを鼻さきで、嘲笑うようなようすをし
て、

「だって、もう、半月もたてば、その値の半分だつてしない
よ。だれが、そんな高い値でこのすいかを買うもんか。」と、女
はいいました。

「奥さん、そういわんで、ど、どうか、買つてください。」

「小僧さん、二十銭まけておきよ。おまえが、一日売つて歩いた
つて、売れはしないから。」と、女は、その中で、いちばん大き
なすいかを取りあげていいました。

「お、奥さん、私は、主人から、その値でなければ、う、売つ
てきては、いけんといわれました。」と、小僧は、耳たぶを直つ

赤かにして、答こたえました。

「それでは、まからないのかい、じゃ、いらないよ。」

女おんなは、邪慳じゃけんにいつて、手てに取りあげていたいちばん大おおきなす
いかを投なげ出だすように、かごの中なかへ落おとしました。あまり、手荒てあら
であつたため、大おおきなすいは、下したのすいかにぶつかつて傷きずがつ
きました。

小僧こぞうはびつくりいたしました。

「お、奥おくさん、こんなに傷きずがついてしまいました。傷物きずものになつ
ては、主しゅじん人にいつかつた値ねでは、どこへいつたつて売うれませ
ん。ど、どうかこのすいかを買かつてください。」と、顔かおを赤あかくし
て、頼たのみました。

「なに、私が、そんなことを知^しつたものかね、私^{わたし}は、下^{した}に置^おいたばかりなのだよ。」と、女^{おんな}は、邪慳^{じゃけん}にいつて、相^あ手^{いて}にしませんでした。

この有^あり様^{さま}をだれも見^みていたものはありません。ただ、太陽^{たいよう}だけが、空^{そら}から、ながめていました。小僧^{こぞう}は、途^と方^{ほう}にくれて、目^めに、いっぱい涙^{なみだ}をためていました。

ちようど、このとき、あちらから、かすんだ往^{おう}来^{らい}をまだ若^{わか}い薬^{くすり}売^うりがやってきました。二、三年前^{ねんまえ}まで、おじいさんが、薬^{くすり}売^うりにやってきたのでしたが、このごろは隠^{いん}居^きでもしたのか、まだ若^{わか}い男^{おとこ}が、旅^{たび}から、わざわざこの村^{むら}の方^{ほう}までやってきて、薬^{くすり}を売^うるのでありました。

「先祖代々の家伝、いつさいの妙薬。」（せんぞだいたい かでん） といつて、歩いてきました。

やがて、若い薬売りは、箱を負つて、すげがさを目深にかぶつて、草鞋をはいて、こちらにきかかりますと、女と子供が、なにかたがい_{（わらじ）}にいいあつてゐるようすでありましたから思わず歩みをとめました。

「薬屋さん、いつさいの妙薬なら、このすいかの傷がなおされるだろう。」と、女は、あざ笑つていいました。（くすりや みょうやく）

若い薬売りは、いつたい何事が起こつたのだろうと思つて、にわかに、返事ができませんでした。すると、小僧は、どもりながら、今日のことをいつさい語つて聞かせたのです。（きょうの こゝろ）

この話を聞いた薬売りは、静かに顔をあげて、

「奥さん、それは、あなたのほうが無理です。」といいました。

女は、たいそう怒りました。

「なにが無理か。おまえこそいいかげんなうそをいつて、人をまかそうと思っているじゃないか。いつさいの妙薬なら、このすいかの傷をなおしてごらん。」といいました。

若い薬売りは、しばらく黙っていました。

「奥さん、なおしてみせます。」といつて、脊に負っている箱を

おろしました。そして、中から金色の薬をとり出して、その薬

を水で溶かして、すいかの傷口に塗りました。太陽の暖かな

光のために、薬は流れて、大きなすいかを金色に染めてしま

ました。

小僧こぞうは、あつけにとられて見てみいました。すると、不思議ふしぎにす

いかの傷口きずぐちは、ふさがってわからなくなつてしまつたのです。

女おんなは、これを見て、言葉ことばが出でなく、ただぼんやりしていました。

「このすいかを食たべた人ひとは長生ながいします。今晚こんばん、このすいかを

夜店よみせに持もつて出でると、きつと値ねがよく売うれますよ。」と、薬売くすりう

りはいいました。そして、若い薬売わか くすりうりは、あちらにいつてしま

いました。

薬売くすりうりも八百屋やおやの小僧こぞうもいなくなつてから、女おんなは、ほんとう

に不思議ふしぎなことがあるものだと考かんがえました。

「あの薬売くすりうりは、いつもくる薬売くすりうりと顔かおがちがつていたよう

だ。今日の薬売りは、神さまか仏さまにちがいない。それでなく、どうして、あのすいかの傷がなおったろう。たしかに、私の目には、傷口がふさがったように思われた。」と、ひとり女はつぶやきました。

それから、女は、薬を塗って、すいかの傷口がなおるものかと、二、三人の人々にたずねますと、みんな大きな口を開けて、

「おまえは、きつねにばかされているのではないか。」といつて笑いました。それで、女はますます驚いてしまいました。

女は、日の暮れるのを待っていました。やがて、晩方になると、町へいってみました。もう八百屋の小僧が夜店を出していました。そして、ちょうど、ひげの白い老人が、その前にうずく

まつて、例れいの金きん色いろのすいかを取りと上げ、カンテラの火ひに照てらしてながめていました。

女おんなは、この有あり様さまを見ると、そばへ寄よつてきて、

「小僧こぞうさん、このすいかを私わたしに売うってください。すこし子細しさいがありますから。」といって、銭ぜにを払はらつて、おじいさんの手てから奪うばうようにして持もつてゆきました。

空そらは、よく晴はれて、きれいな星ほしの光ひかりが、幾いくつもこの町まちを照てらしていました。

女おんなは、家うちに帰かえつて、ランプの下したで、もう一度よくすいかを見みました。しかし、どうしたことか傷口きずぐちがわかりませんでした。そのとき、家うちじゅうのものがみんな出でてきて、ランプの下したに集あつまりま

した。そして、女の話をきいて、すいかをめいめいが手にとつてながめて、不思議がりました。

「このすいかを切つてみなさい。」と、おばあさんがいわれました。

女の亭主も、おじいさんも、叔母さんも、それがいいといつたので、女は、さつそく庖丁を持つてきて、真つ二つにすいかを切つてみました。すると、その中は、真つ赤であつたばかりでなく、血がだくだくと切り口から流れたのです。

女は、驚いて、目をみはりました。

「このすいかは、生きていたのだ。」と、おばあさんがいわれました。

「あまり、おまえが邪慳^{じゃけん}だから、見せしめのために、神さまが
こうしてお見せ^みになったのだ。」と、おじいさんはいわれました。
円^{まる}い、みずみずしい月^{つき}が、ちょうど窓^{まど}からのぞいていました。
それから、女^{おんな}は、やさしい、いい人^{ひと}になったということでありま
す。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年6月

※表題は底本では、「初夏《しよか》の不思議《ふしぎ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初夏の不思議

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>